

「最強台風」接近下のライブ開催を考える

社会部デスク 湯之前 八州



台風14号では、福岡県内でも強風の影響とみられる看板の落下などが相次いだ。9月19日、福岡市南区（撮影・星野崇）

気象庁が過去最強クラスの勢力と強く注意を呼びかけた9月の台風14号。九州北部に接近した同18日、歌手矢沢永吉さんのライブが福岡市のペイペイドームで開かれた。運営側がファンに対し、自己責任で観覧するよう告知した異例の公演。幸いけが人などの報告はなかったが、開催した判断は妥当だったのか。ファン心理や地域経済への影響などをまなまな事情を踏まえながら、非常時のイベントの在り方を考えてみた。

9月18日正午。台風14号は、中止した。

帰れる人のみ来場を

ライブは日本ロック界のレジェンドである矢沢さんの活動50周年記念。関係者によると、約3万人の来場が想定された。矢沢さんの公式サイトは前日、「台風の動きを注視している。最終的な判断を明日正午までに行いたい」としていた。

日時	内容
9月17日	公式サイトが「台風の動きを注視している。(開催を巡る)最終的な判断を、明日正午までに行いたい」と掲載
18日	公式サイトが開催決定を案内し「自身の判断で必ず安全を確保できる方、帰路に就ける方のみ来場を」などと告知
午前11時半	福岡管区気象台が福岡県に関して「早い所では夕方に風速25m/s以上の暴風域に」「不要不急の外出を控えて」厳重警戒を」と発表
屋ご	福岡県警が主催者側に「安全に配慮を」と要請
午後1時	福岡市地下鉄が午後7時から順次運転を見合わせると発表。路線バスも相次ぎ運転を取りやめ
午後4時ごろ	観客が続々と会場入り
午後5時ごろ	ライブ開演
午後7時ごろ	ライブ終了。会場のタクシー乗り場に数百人の列。JR博多駅や福岡市・天神へ歩く人も1千人以上
午後10時半ごろ	タクシー乗り場の列がようやく解消

矢沢永吉さん福岡公演の経過

人の波が1千以上に

午後4時過ぎ。ドーム周辺は風で飛ばされそうな傘を押し付けていた。

できて危険」との110番が1件入り、警察官が現場に駆け付けた。交流サイト(SNS)には、来場者が宿泊施設や避難所に

「自己責任で観覧」はあり?

18日になり、公式サイトは予定通りの午後5時開演を案内し、この情報発信した。「自身の判断で必ず安全を確保できる方、帰路に就ける方のみ来場を」

「決して無理せず自身で判断を」「断念する方は返金を」

この発表を受け、福岡県警は18日昼ごろ、主催者側に「安全に配慮するように」と要請。主催者側からは「十分に対策を取る」との返答があったという。

防災関係者は「本来は中止をお願いしたかったが、行政にはその権限がない。警察の配慮要請が精いっぱい対応

見え、ライブに急ぐ観客が多く見られた。記者が声をかけたところ、九州各地のほか中国、近畿、北海道からも集結。年齢層は50〜60歳代が目立った。

ライブは午後7時ごろに終了した。高揚した様子で「最高」「台風なんて関係ない」と余韻に浸る観客たち。地下鉄やバスは運行をストップし、ドームのタクシー乗り場は午後10時半ごろまで常時、数百人が列を成した。乗車を諦め、JR博多駅や福岡市・天神へ歩いて向かう「人の波」も1千以上、連なっていた。

押しかけ騒いだとの真偽不明の書き込みもあったが、市や県警、消防、複数のホテルへの取材では、事実は確認されなかった。

きよ宿泊する観客が相次ぎ、損失を埋め合わせる結果に。フロントの女性従業員は「商売のことを考えると、中止した方が良かった」と言い切れない現実がある」と打ち明けた。

イベントと経済効果を巡っては、会場が他の自治体に変更され、地域が大きな打撃を受けた例がある。茨城県ひたちなか市で、毎年夏に催されていた日本最大級の野外音楽フェス「ロック・イン・ジャパン・フェスティバル」。

自己責任、安全確保、地域経済への影響…。非常時のイベント開催の是非は、さまざまな要素が複雑に絡み合う判断となる。

イベントを執行してけが人が出たり混乱が起きたりした場合、迷惑や負担がかかるのは地元だ。主催者にはやはり、「安全」側に重心を置いた慎重な判断が求められるというところだろう。

福岡市ではこの日、歌手小田和正さんの公演をはじめ、催しやイベントのほとんどが中止となった。

矢沢さんの公式サイトは台風下でライブを行う理由として「ドーム球場は屋根があり、頑丈に造られている」「中止しないでください」「開催してください」という、ものすごい数のメールが届いたこと

会場周辺の住民などには「中止すべきだった」と考える人が相当多かった。近くのコンビニは従業員の安全を考慮し、25年前のオープン以来、初めて18日午後10時営業を取りやめた。後日、防犯カメラの映像を再生すると、店舗の軒先で風雨を避け

ながら、観客とみられる人たちが深夜までタクシーを待つ姿が写っていた。「今回の台風は「過去最強」と盛んに報道されていた。けが人がなかったのはたまたまに過ぎない」と経営者の女性(75)。

50代のタクシー運転手はライブ終了後の観客を乗せ、会場と博多駅や天神の間を10度往復した。「風が強くて運転するのも危険で、仕事を切り上げようと考えていた。だけれど、歩いて移動するファンは危なっかしくて、人助けのつもりで車を走らせた」

ドームから約1.5kmの唐人町商店街で飲食店を営む男性(64)は「たかさんの人がアーケードで夜を明かし、混乱を来すようなことにならなくて良かった。住民を不安にさせる催しはすべきではない」と話した。

台風15号で帰宅難民

矢沢さんのライブから5日後の9月23日。今度は台風15号が東海地方に接近した。勢力は比較的小さかったが、線状降水帯が発生して記録的大雨に。静岡県袋井市で開かれた音楽ユニット浦島坂田船のコンサートでは、新幹線などが運転を見合わせ、帰れなくなった約800人が施設内で一夜を明かした。新幹線の駅がある同県掛川市は、駅で足止めされたファンのために市のホールを翌日まで開放。市職員は、飲料水や毛布の提供に追われた。主催者によると、台風の規模のほか、当初は新幹線などに運休の予定がなかったことを勘案し、計画通りの開催を決めたという。

イベントが、観光や町おこしをけん引するエンジン役を担う地方。こうした状況では自治体側が主催者側に気を使いは、開催の是非や安全配慮などの要請を「強く言いくい面はある」(福岡県内のある市の担当者)との声も上がる。

その上で、静岡の例も掛川市は、掛川市民の安全確保でただでさえ忙殺される災害時に観客への対応が重なり、相応な負担となったはずだ。地域も含めた全体の安全ということも考慮すれば、勢力が大きくない台風であっても、中止の判断が「一番妥当」とした。

音楽イベントと社会の関わりについて永井純一・関西国際大准教授によると、参加判断を観客の自己責任とする開催手法は、コロナ禍以降に少しずつ見られ始めたという。「ウイルスの感染拡大で、イベントに対する第三者の目が非常に厳しくなった中で生まれた現象だ」と分析する。

「コロナ禍や災害の頻発、地域経済との結びつきの強まりなどを背景に、イベントの在り方は過渡期にある。非常時の開催判断も、今が過渡期と言えるかもしれない」とただし、文化とか、エンターテインメントが『市民の敵』になつてはならず、公共性を考えた判断が求められる」との視点を示した。

加の判断を主催者が観客の自己責任に委ねた点を問題視する。「ファンは見た人ばかりならわいだから、多少無理をしても来る。『自分で決めなさい』というのは良心的に見えて大変無責任だ」

「安全」側に重心を置いた慎重な判断が求められるというところだろう。